

探訪 北の風景 76

十勝開拓発祥の地 十勝管内豊頃町大津

青木和弘

十勝川は十勝岳を主峰とする十勝山系を源頭に、恵み豊かな十勝平野を潤し、豊頃町大津で太平洋に注ぐ。かつて河口は東西二つに分かれ、東側を十勝川、西側を大津川と呼んだ。

その十勝川左岸河口にアイヌ集落トカチプト（十勝太）があり、17世紀半ばまで、和人とアイヌ住民の商場「トカチ場所」があった。サケなどの海産物や鹿皮などが取引きされていた。その後、トカチ場所は現在の広尾町に移るが、18世紀末に大津川右岸の大津にも取引拠点が置かれ、江戸時代末期の19世紀中ごろから和人が定住をはじめ、青森県出身の堺千代吉は1863（文久3）年に移り住み大津の発展に寄与するが、当時は「6戸

の家があるだけの未開の地」だったと、大津海岸を背にして建つ「十勝発祥之地」碑の解説板に記されている。

1880（明治13）年、「十勝外四郡各村戸長役場」が大津に設置され、ここが十勝行政の中心地になる。大津川は水深に余裕があり、内陸に向かう船の運航に適していたので、入植者の物資輸送の拠点として急発展する。大津は十勝開拓の玄関口だったのだ。

明治10年から20年にかけてはサケ漁と鹿の狩猟で和人が入り、その後、農業開拓で入植者が内陸に向かう。1892（明治25）年に大津から現在の帯広より北の芽室まで通称「大津街道」が開通する。さらに1897（明治30）年に函館・大津間に定期航路が開設になり、交通網の整備で十勝に移住者が急増してブームを呼び、莫大な富をもたらした。

十勝の開拓は、国費を投入した屯田開拓と異なり、近代農業の将来性に着目した華族や大資産家ら、民間の資金力が先導したのが特徴ともいえる。帯広市の開拓で依田勉三が率いた晩成社がよく知られるが、池田町の開拓では旧鳥取藩主家当主の池田仲博侯爵が経営した「池田農場」や、大資産家で「高島暦」でも知られる高島嘉右衛門（高島吞象）の「高島農場」などが大きな役割を果たした。

ちなみに、明治30年頃の大津は戸数300戸。



どんなジュエリーアイスに出会えるかは風任せ、波任せで運試しのようだ。この日はやや少なく、砂混じりのものも多かったが、太陽で美しく輝く。朝夕の光はなお印象的だ

人口が1千人を超え、市街地には商業38、旅人宿8、料理屋6、質屋1、湯屋1、医師1、鍛冶2、理髪職2など十勝一の賑わいを見せたという。だが、1904（明治37）年になると20キロメートルほど内陸の豊頃には鉄道駅ができ、3年後には根室本線が全線開通する。輸送の主力は船から陸路の鉄道に移り変わっていった。

大津村は1955（昭和30）年、地域を三分割して、浦幌町、大樹町、豊頃村に編入され消滅した。十勝川は1963年、同村流域の水害対策で河口が大津川一本に切り替えになり、大津川の名称も十勝川になった。

最近、その十勝川河口の大津海岸が観光で注目されている。真冬の「ジュエリーアイス」だ。イ





大津海岸には写真のように流木が束ねて立てられていたが、本年になって倒れて崩れてしまったという。豊頃町に問い合わせたが、誰が何の目的で作ったのかは分からないという。訪問者に強い印象を与えるオブジェに思えた

大津海岸を背にして建てられた「十勝発祥之地」碑。ここから十勝川を遡り、各地へ開拓者たちが入植していった



「十勝発祥之地」碑の解説板には、図版付きで当時の大津港や村の繁栄の様子が記されている

インターネットで知られるようになり、内外の観光客が観光バスで訪れる人気スポットになっている。ジュエリーアイスは、厳しい寒さで氷結した十勝川の氷が太平洋に流れ出て、海岸に打ち上げられたもの。波にもまれて角が取れ、クリスタルのように透明なのが特徴だ。太陽の光を受けて宝石のように輝く。厳冬の1月中旬から2月下旬が見ごろで、十勝川の河口近くの砂浜で見られる。積雪は少ない地域だが強烈に寒いので、しっかり防寒が必要だ。

現在の豊頃町は農業と漁業の町。人口は6月末現在3137人で、役場はJR豊頃駅から西に約3キロメートルの十勝川右岸の茂岩本町にある。1880年の大津の戸町役場設置を開町とし、2020年で開町140年になった。